

仲間づくり教養コース ②国際社会学

ロシア・ユーラシアのいま

第5回 湧き立つユーラシア

中央アジアのダイナミズムとシルクロード再生

日時 11月21日(土) 10:00am~

場所 ふじみ野交流センター 講座室

講師 堀江則雄氏 (法政大学社会学部 講師)

受講生 33名

第5回目の11月21日(土)は、今年最後の三連休の初日でしかもポカポカ陽気。絶好の紅葉狩り日和とあって、お出かけの方が多かったようで少し寂しい人数でした。

しかし先生のユーモアに溢れたテンポの良い講義に、受講生は吸い込まれて行きました。

冒頭先生から、先日発生した<パリ同時テロ事件>の、背景などについて詳しくご説明戴いた。

<はじめに>

*中央アジアの民族・国家的境界画定

~タジク共和国は、1929年まではウズベク共和国に属する自治共和国

~キルギス共和国は、はじめロシア連邦共和国に属するカラ・キルギス自治州として発足

1926年にキルギス自治共和国に昇格したのち、1936年にソ連邦構成共和国の一つとなった

中央アジアの歴史と台頭

*キプチャク・ハン、チャガタイ・ハン(13, 14c) ⇒チムール帝国(15c) ⇒ブラハ・ハン国、ヒヴァ・ハン国(1920年まで)

*ロシアの進出、トルキスタン総統府(18c)、綿花、ロシア工業化

植民地化への反乱⇒トルキスタン自治共和国(1924年) 民族・共和国境界画定(オアシス中心地フェルガナ盆地めぐる争い)

*農業集団化とモノカルチャー、遊牧民の定住化

民族言語とエリート層の確立⇒5ヶ国独立(1991年)

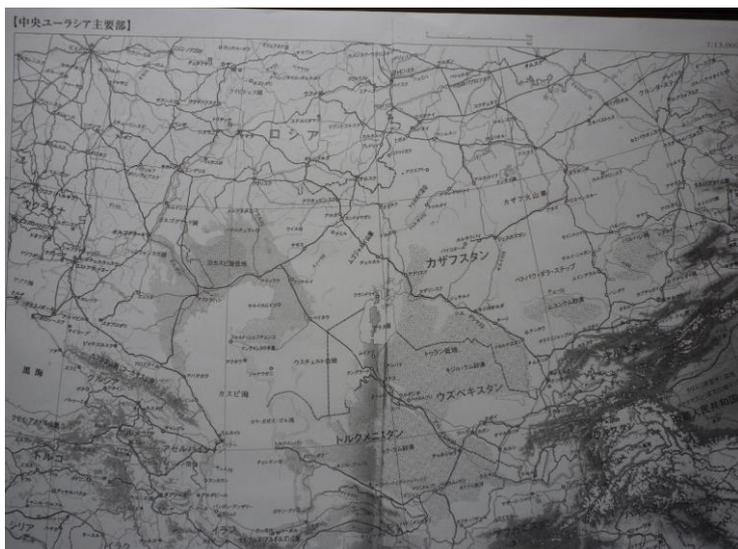
*ナショナリズム台頭⇒各国の英雄賛美

チムール生誕660年祭(1996年) 哲人アバイ生誕150年祭(1995年) マナス1000年祭(1995年) サーマーン朝1000年記念行事(1999年) ブハラ、ヒヴァ建都2500年祭(1997年)

イスラム復興

マッハラ(地域協同体)

*公用語⇒国家語と民族館交流語



公職には国家語話せること

キリル文字からラテン文字へ、当初はアラビア文字

通貨、軍隊、政治・行政機構、多民族国家、人口 6000 万人

*モスク、マサドラ、倉庫や家畜小屋⇒日常生活での復活

地域の儀礼や習俗から、長老（クサカル）、ラマダーン明け食事会、ナン焼き釜の共有、相互扶助ネットワーク

カザフスタン、ウズベスタンの大国志向

*カザフ⇒エネルギー資源国、「成長センター」を自負、経済規模世界 30 位以内をめざす
産業国家が国家目標、「ユーラシア統合」を提唱

*ウズヘキ⇒2700 万人の最大人口を誇る、「共通の家トルキスタン」
石油・天然ガスパイプラインの他方向化

*ナザルバエフ（カザフスタン）カリモフ（ウズベスタン）両大統領とも政権 25 年超（権力の集中）⇒後継者問題（娘か娘婿？）～影響はウクライナ問題より大きい？



ナザルバエフ (カザフスタン)



左からダリガ、ディナラ、アリヤ。美人三姉妹。

<カザフスタン> 長女ダリガ=副首相 (社会福祉担当) 自殺した夫が父に反旗
次女ディナラ=娘婿が日本でいう処の経団連会長職
三女アリヤ=キリギス大統領アカエフの長男と結婚後離婚、サッカー選手と結婚

【何れを後継者とするか、地元での注目度が高い】

カリモフ (ウズベキスタン)



(左)グリナラ、(右)ロラ。こちらも美人姉妹。

<ウズベキスタン> 長女グリナラ=外務次官、国連代表部、後継者を公言し父親激怒
次女ロラ=ユネスコ常任代表、長女の態度に批判的である

【こちらも何れになるか、はたまた別の第三者の台頭か大いに注目される】

キルギス、タジキスタン、トルクナニスタンの現実

*キルギス⇒ネポティズム、05年・10年流血の政変

最初の市場経済導入

*タジク⇒97年に内戦終結、イスラム勢力政権参加、シムダリア、アムダリア、河川と水資源

*トルクメン⇒95年国連で「永世中立国」承認、積極中立外交、世界第4位の天然ガス埋蔵
特異な個人崇拜体制



新シルクロード構想と「シルクロード一帯一路」

*シルクロード経済地帯で「大ユーラシア経済圏」→鉄道、高速道路、PL（パイプライン）

*米軍と米国のプレゼンスと撤退→アフガン戦争、ウズベク、キルギスの基地

*ロシア→影響力維持、集団安全条約機構（ベラルーシ・アルメニア・カザフ・キルギス・タジク・ウズベク）、関税同盟

*中国→圧倒的かつ急速な影響力拡大、5ヶ国の最大貿易相手国、PLで天然ガス輸入、
13年各国と500億ドル借款契約、シルクロード基金400億ドル
大ユーラシア経済圏構想～「16（東欧を含む）+1（中国）」の30億人

【文責：秋山孝昭】